

藤原俊之 監修 高橋哲也 編

《理学療法 NAVI》

リスクに備えて臨床に活かす 理学療法にすぐに役立つ薬の知識

森 明子（兵庫医療大学リハビリテーション学部理学療法学科）

「理学療法」と「薬」、どちらも医師の処方という共通点がある治療法です。その両者の視点を踏まえた、すぐに役立つリスク管理本がこれまであったでしょうか。本書には読者を引き込み、理学療法士の頭脳に響く仕掛けがちりばめられており、まさにリスク管理能力を進化させる書籍です。

2020年4月以降の理学療法士養成校への入学生は、改正された「理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則」が適用となり、専門基礎分野として「臨床薬理の基礎」を学ぶことが必修化されました。その背景には医療の高度化やさまざまな医療ニーズに対応していくため、理学療法士も薬の知識が必要不可欠とされたことがあります。

チーム医療の概念が広まり、医療現場において医師、薬剤師、看護師、理学療法士、作業療法士などは、お互いに連携して患者の治療に当たり、患者中心の医療を展開することが定着してきました。そこではさまざまな情報交換や共有がなされますが、これまで理学療法士は薬の知識を学ぶ機会が少なかったため、患者に処方されている薬の情報を得ても、それを踏まえたリスク管理下での理学療法につなげる難しさがありました。

本書には、理学療法士が担当することの多い疾患の病態や症状の特徴が簡潔に書かれています。各疾患における「その薬が処方されている目的と効果」、「薬剤はいつまで使われるか？」など、投薬治療の一般的な見通しについての解説があります。日ごろ、臨床で経験する場面が会話形式で書かれており、理

学療法上、特に留意すべき薬剤について触れられています。さらには「理学療法上の POINT !」として「理学療法中の事故を防ぐための中止基準」や「リスクマネジメントの具体策」も提示されています。常に日々の臨床場面に当てはめて読み進めることができる構成なので、まるで本書に登場する理学療法士が自身であるかのような感覚になります。書かれている内容の一つひとつがふに落ち、多くの気づきが得られ、深い学びにつながる流れになっています。

重複疾患を有する患者の場合、処方される薬は複数に及ぶため、薬の全てを把握することに困難さを感じることもあります。しかし、本書にもある「クスリはリスク」という言葉を踏まえると、薬の数だけリスクがあると読むことができます。そのため、理学療法を実施する上で、なぜ薬の知識を知っておく必要があるのか、本質的に理解しておくべきことは何なのかを端的にまとめてあり、具体例も示されています。

本書は初学者にも読みやすい内容になっています。理学療法士だけではなく、臨床実習に臨む実習生や、リハビリテーション医療に携わる多くの関連職種の方にお薦めします。急性期・回復期・生活期などさまざまな臨床場面でより適切なリスク管理を行うためにもぜひ、お手元に置いていただきたい一冊です。

（A5・頁352 2021年5月 定価：3,740円（本体3,400円＋税）[ISBN978-4-260-04341-0] 医学書院刊）